

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM NEWS

館長の作家対談
加賀乙彦(小説家・精神科医)



横尾忠則 演劇実験室「天井桟敷」創立時の劇団案内用ポスター 1967年 当館蔵

館長の作家対談

ゲスト
加賀乙彦
(小説家・精神科医)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)

『永遠の都』シリーズに続く自伝的大河小説『雲の都』の第4部、第5部を7月に出版された加賀乙彦氏をお招きし、菅野館長がお話を伺いました。

館長▼このたび、大長編が完結しておめでとうございました。『雲の都』に入ってからどのくらい時間が経ったのですか？

加賀▼『雲の都』が12年ぐらいいです。2000年の新年号からの連載なので、正確には前年の1999年から書いていますね。

館長▼連載中1回も休んでいないのですか？

加賀▼一度も休んでいません。

館長▼偉いですね。その間に奥様が亡くなられているのに。

加賀▼女房が亡くなって、終わりにできたんです。少し、フィクションにですけど。

館長▼その前の『永遠の都』が終わって、すぐこちらにとりかかったのですか？

加賀▼いや、戦後までは書く気はありませんでした。でも「新潮」が続編を書いてほしい、戦後のことを書いてほしいと。僕は『永遠の都』で書きたいことを全部書いたので、一度は断りました。でも色々な資料を出して、少しずつ読んだりノートをとったりしているうちに、資料を使いきれいになかったことが判って。

館長▼『永遠の都』は作者の生まれていない時代か

館長▼日本の戦後の小説の中で一番長い方ですね。並行してというか、その間に『高山右近』などを書かれたわけだ。

加賀▼それは、キリスト教に何か非常に動かされたというか。

館長▼キリスト教に入信されたのはいつですか？

加賀▼58歳の時です。

館長▼という、1987年くらいですね。

加賀▼僕が58歳で、女房が49歳、その年のクリスマスに洗礼を受けました。

館長▼入信の動機をお聞きするのはふさわしくないかな。カトリックに対する関心は若い時から持っておられたのですか？

加賀▼上智大学で10年教えていたので、大勢の神父と知り合って、中には非常に仲の良い友達もできました。主人公がカトリック信者の『宣告』を書く時にカトリック信者を知っておこうと思って、その中の一人、K神父にいろいろ教えてもらいました。彼は哲学科の教授でカトリック神学を学生たちに教えていましたが、工学部出身の理系の人だった。理系の人とは同じような用語を使えるし、もの考え方が似ているところもあった話

ら始まりますが、『雲の都』の場合は主人公がはっきり大人になっていきますね。あの主人公は、加賀さんと同年代？

加賀▼生年月日でいくと同年代です。

館長▼自分が生まれる前や過去は聞き書きや資料を調べて書くと思いますが、『雲の都』の場合は主人公自身が意識的に生きていくし、いろいろ経験している時代ですね。どちらが小説家として、書きやすいですか？

加賀▼経験している時代の方が書きやすいです。自分の日記を見ればいい。ただ、それだけじゃなくて、やはり資料も必要で、例えば戦後に真珠湾の裁判があるでしょう？

館長▼東京裁判のことですか？

加賀▼いや、アメリカであつた裁判です。その英語の記録を読んだりして広げています。そうすると相手側の目からも見られる。自分の目から見ると、向こうが僕の方を見ている。そして、それをまた別な人間が見ているというふうに多面的になります。

館長▼自伝的ではあるけれど、だいふフィクションもふくまれていますよね。

しやすいのでその人に教えてもらいましたが、『宣告』を書き終えて、1979年の3月、僕は上智大学を辞めました。

館長▼『雲の都』の中にも書かれていますね。今そういうことを伺ったのは、加賀さんの最初の小説『フランドルの冬』に非常に感銘を受けた記憶がいまだに鮮明なのですが、アルジェリア戦争に動員されて精神的に傷ついた人物の話でしたね。

加賀▼はい。

館長▼あの小説を読んだ時から、この作者は、この人物を通じてカトリックに対する関心を小説化しようという意図があるのではないかと、という読み方をしたんです。当たっているかどうか分かりませんが、あの時から加賀さんの小説を読むと、この人はいつかカトリックに近づく人じゃないかと感じていた。どこでどういうふうに罪人が救済されるか、そういう問題に光を当てようとしている作家さんだな、として読んでみました。

加賀▼なるほど。

館長▼ずっと加賀さんのカトリックに対する思いに関心をもってあなたの小説を読んできて、今度の『雲の都』でも特に最後の奥さんが亡くなると

加賀▼自伝ではないですよ。フィクションなのに、みんな自伝、自伝という。僕が働いている病院の看護士たちが読んで、「先生、あんな悪い事して」って。「奥様に悪いじゃないですか、あんな事をしちゃ」なんて、たしなめられる笑。

館長▼日本の伝統的な文学風土みたいなもので、小説の読み方がそのように慣らされているせいでしょう。『雲の都』に限ってお話しすると、戦後に我々が経験したいろいろな社会的な事件がありますね、メーデー事件から始まって全共闘の運動とか、三島由紀夫の事件とか、阪神の震災なども。戦後の歴史の日本の変動の中で生きている主人公はもう自己形成という年齢ではなくもつと成熟している。この背景になっている時間の動きと、一人一人の人物が社会の動きの中にうまく収まっている感じを僕は受けました。これからもう一度、『永遠の都』と『雲の都』がそれぞれどう時代と関わっているか、その時代背景と個人の生き方がうまく溶け合っているかと、じっくり読んで考えてみようと思っています。

加賀▼僕はフランスに留学していろいろな新しい体験をしました。この小説ではそれは全部抜いて、

ころではつきり出ていて、小説の質的な特徴としてとても印象的でした。でも、自分はなぜカトリックになったかということ、こういう場で何うのは難しいかな。

加賀▼それはいくらか人に話しても分かってもらえないんですよ。この信仰に入つたのはなぜとか、何が動機だったとか、いくらか聞かれても、うまく答えられない。つまり、言葉にして言えるような心の変化ではないわけだから。心理というのは分かりやすい人間の心の動きですが、魂の方は人間の体とくっついて、奥の方にある心の動き。それは他人には絶対分らないものですよ。

館長▼言葉の届かない領域でしょうから。

加賀▼言葉が届かないし、それを表現する言葉もない。聖書の言葉を少し使って、こういうイエスに僕は惚れてしまった、としか言えない。それが57、58歳の時におきたんです。上智大学を辞めてから7、8年は経っていました。カトリックというか、キリスト教と自分との関係が非常に密接なような、しかし遠いような、そういう曖昧な状況にいるのがすごく苦しくなった。それで、先ほど話したK神父のところに行ったら、「4日間ほど

東京での生活を中心にして書きました。ただ、火之子という女の子が韓国のお墓、お寺を調べて先祖を探って行って新しい親戚が増えるという、韓国へとつながっていくところは、この小説の一つの魅力だと思っています。東京だけじゃなくなつて。

館長▼そうですね。戦後に東京が国際都市化した面、それが入らないと東京を書いたことにならないでしょうね。あなたは東京生まれですか？

加賀▼三田で生まれました。お爺さんのところで。館長▼あの盲腸を自分で手術したつていう、『永遠の都』の中に出てくるお爺さんですね。

加賀▼そう、あのものすごいお爺さん。

館長▼あれは自伝的ですか？

加賀▼自伝的。母は「やつた」つて言うけれど、私は見たわけじゃないから本当かなという話はあるけれど。

館長▼『永遠の都』で、あの場面はすごかった。加賀▼脊髄麻酔だけれど、切腹みたいに切開している途中で麻酔が切れてくる。その頃はこういう麻酔だったか外科医にも聞きました。みんな脊髄からやっていたそうです。

カトリックへの入信

館長▼『永遠の都』は、20年近くかつたんですね？

加賀▼『永遠の都』と『雲の都』とで25年くらいかかっています。枚数は大体9千枚くらい。

空けておきなさい。あなたの質問を全部引き受けます」と。カトリックあるいはキリスト教について理解できない事があるに違いない、例えば、イエスの死とかイエスの死のあとの復活とか、イエスが死んだ後、弟子たちが急に敢然として宣教を始め、使徒行伝によるといろいろな不思議な出来事が彼等の周りにでてくるのか。あれは何なのかと普通の人の聞いても分らない、神父に聞かなければ分らない。『宣告』を書いて、僕はカトリックをある視野にとらえて距離感も保つてきたけれど、それが揺らぎました。何か訳のわからないものに憑りつかれているような気がして非常に苦しい。そこで4日間の暇を作りました。女房も一緒にいきました。僕には200くらい分らないことがあつて、神父に全部、これはどういう意味だと質問しました。例えば、どうして神様はユダヤ人を選んだのか、日本人を選んでもいいんじゃないか等々を僕が理解できるまで言葉で説くのは大変だったと思います。

館長▼その4日間の後、すぐ洗礼を受けられた訳ですか？

加賀▼4日じゃなくて、3日目のお昼で終わっちゃいました。3日目の昼頃、僕は200幾つかの質問の全部が分った。女房も自分のノートを取って色々な質問をしていたけど、全部分った気になった。僕はこれ以上何も質問が無いという事態になり、キリスト教は全て明々解々になったという瞬間が来て嬉しかった。嬉しいと思っていたら、風が吹いてきて、森がざわざわいつている。その日は

加賀乙彦 (かが・おとひこ)

1929年東京生まれ。小説家、医学博士(精神科)。本名・小木貞孝。1953年東京大学医学部を卒業。精神医学、犯罪学を専攻し病院、刑務所勤務の後、1957年から3年間フランスに留学。東大附属病院精神科助手、東京医科歯科大学犯罪心理研究室助教授を経て、1969年から79年まで上智大学教授。第1作の長編『フランドルの冬』で67年度芸術選奨文部大臣新人賞受賞。73年、名古屋陸軍幼年学校時代の体験をもとにした『帰らざる夏』が谷崎潤一郎賞を受賞。79年、死刑囚を描いた『宣告』で日本文学大賞受賞、同年より文筆に専念。86年より、自伝的大河小説『永遠の都』の連載を始め、87年のクリスマスにカトリックの洗礼を受ける。97年度、芸術選奨文部大臣賞を『永遠の都』で受賞。2000年より連載された続編『雲の都』は、12年に第5部『鎮魂の海』で完結し、毎日出版文化賞特別賞を受賞。2011年、文化功労者となる。



『雲の都』第4部「幸福の森」、第5部「鎮魂の海」、いずれも新潮社、2012年7月



当館収蔵品の紹介 46

寺山修司草稿「無題」

今号の表紙は、横尾忠則による「天井桟敷」創立時の劇団案内用年間公演予告ポスターです。寺山修司は、1965年から世田谷区下馬に居を構え、67年に演劇実験室「天井桟敷」を設立しました。結婚して間もない寺山が、学生たちを下馬のマンションの「ユニット」に集め、劇団を組織したのです。母一人子一人で育った寺山にとって、それは仮想の大家族だったのかもしれませんが。

今回ご紹介する資料は、「天井桟敷」設立から10年後に書かれた草稿です。日記の体裁で、短歌や映画の感想を、自らの近況を交えて伝えています。

寺山修司

×月×日 「現代百人一首」をえらぶことになって、まとめて他人の短歌を読みはじめる。古いノートから忘れていた往時の歌がぞくぞくと出てくる。

たとえば小野興二郎の

われの子をみごもるためにあかきあき夕雲が空を占めはじめをり

などは、落すわけにはいかないだろう。

×月×日 澁沢龍彦氏より「思考の紋章学」送られてくる。澁沢氏もまた鏡花の「草迷宮」の謎ときに挑み、それを迷宮と母胎の同一化として解きあかしている。一気に読み通す。久々に刺激的な数時間であった。

×月×日 ジャネット・ボードの「世界の迷路と迷宮」、迷路の起源を説き、図版と写真を収載した豪華本。それと、M・クリストファーの「世界の魔術」。

×月×日 山川蟬夫という得体の知れぬ男より句集が送られてくる。おや、と思うような句がある。たとえば、

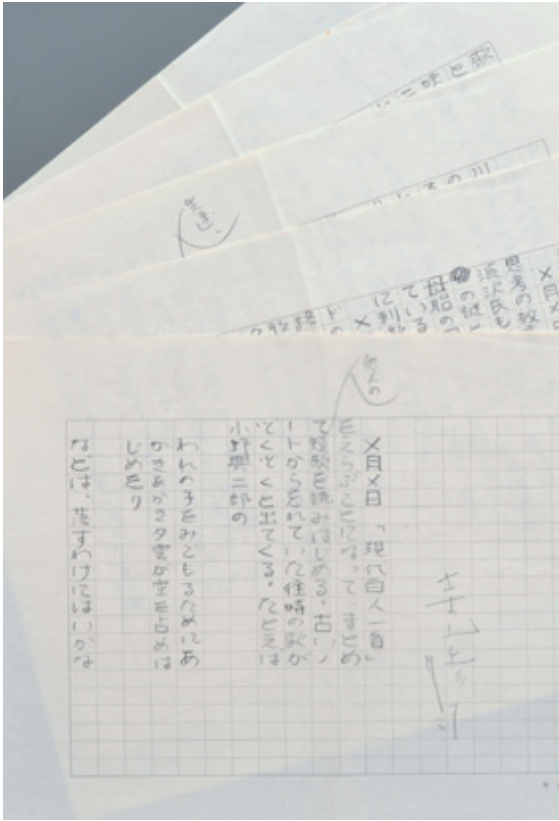
切なげに火事が消えたる初鰯

塚本邦雄の解説によつて、山川蟬夫が大宮伯爵こと高柳重信のペンネームであることがわかる。「六つで死んでいままも押入れて泣く弟」などという句もあり、心に残った。

×月×日 ロッテルダムで国際詩人祭の朗読会で親しくなったイタリアのサングイネットイの「イタリア綺想曲」の訳（河島英昭）が出た。原書で送ってもらつて読めなかったものだけに「待望久しい」というべきか。早速、読みはじめる。

×月×日 大室幹雄「囲碁の民話学」求める。サングイネットイを読みつづけるが、時間が来て、中断。今日は、私の実験映画、新作の「マルドロールの歌」など十一本を西武劇場でまとめて上映する「寺山修司幻想映画展」の第一日目。一柳慧、ニコラ・パティユなどが来てくれた。

×月×日 「現代思想」に連載しはじめた市川浩の「現代芸術の地平」を読む。ステントの「進歩の終焉」を引きながら、芸術における、受け手の通信路客量を問題にしているところが興味ふかい。このことについてふれるには、スペースがないのでやめるが、市川氏の次回が待たれるところである。映画展の二日目。松本俊夫、合田佐和子、岡部道男、山野浩一氏ら。二日とも満員だったが、例によつて批評家、映画作家などはほとんど観に来なかった。



×月×日 「海王星の不条理」「あなた」を読む。「皇太后の華丸」声と墓標の群」——この、ぞくぞくするような詩的な題名は、蓮見重彦氏から送られた「反『日本語論』に所載の論文に付されたものである。言語に対する新鮮な視点は、さながらシャワーを浴びるような読書のひとときを過ごさせてくれた。蓮見氏が、当代きつての達文家であることは、もはや、まぎれもないことのようなだ。

この草稿は、文中表記から推察して1977年に書かれたものと思われます。新作映画「マルドロールの歌」の制作年と、澁澤龍彦からの献呈本「思考の紋章学」の発行年が同年であるためです。

この年は、また寺山修司の「ユースレター」が始まった時期でもあります。「ユースレター」とは、複数の限定した友人に、同じ内容の手紙（和文タイプ打ち）を定期的に送るものです。

「忙しさにとりまぎれてお便りを書く時間がないのでロンドンの友人のジム・ヘインズのまねをしてユースレターを送ることにしました。これはその第5便です。29人の友人に同じ手紙を書くことになりましたが、ごぶさたするよりは

資料受贈報告

▼成田敦子様・荒木瑛子様より江間章子関連資料一括、萩原朝美様より萩原葉子関連資料一括

▼浅山泰美様 池亀弘子様 井戸巨様 加藤圭子様 小島千加子様 近藤雅子様 佐藤喜一様 佐々木央様 杉山豊様 谷口麻耶様 野坂照様 八坂幸一様 日高のぼる様 深田澤二様 藤井ひかり様 堀薫様 眞木千絵様 峰岸了子様

▼青森県近代文学館 NHK出版教育文化編集部 大阪国際児童文学館 大阪大学近代文学研究会 大佛次郎記念館 かこしま近代文学館 河出書房新社 黒澤明研究会 慶応義塾大学アートセンター 駒沢大学禅文化歴史博物館 小諸・藤村文学賞事務局 さいたま文学館 湖北社出版部 昭和館 書肆山田 逗子市芸術文化事業協会 スリープレス 成城大学グローバル研究センター 高志の国文学館 田辺市立美術館 たましん地域文化財団 田原市博物館 沖積舎 土屋文明記念文学館 東京子ども図書館 東京都江戸東京博物館 東京都現代美術館 徳島県立文学書道館 函館市文学館 姫路文学館 ふくい風花随筆文学賞実行委員会 ふくやま文学館 ボイスカワ大阪連盟 前橋文学館 松本市立博物館 松山市立子規記念博物館 港郷土資料館 山梨県立文学館 弥生美術館 横浜都市発展記念館

▼「あけび」宇宙風「海」海紅「がいつ亭」街道「風花」風「かねこと」「カプリチオ」寒雷「橄欖」季刊作家「くきき」九品仏川柳会「群系」「樺」原型富山「鴻」心「花」山河「山暦」春耕「春燈」正午「抒情文芸」「新現実」「新現代詩」「青衣」「川柳研究」「双鷲」「短歌人」「丹青」「地中海」「飛火」「白」「歯車」「ブチ★モンド」「麗」文芸もず「文章歩道」「POULIA」本の「Parking」窓「ゆく春」「ランブル」「りんこの木」「樺様」の各誌ほかより資料の寄贈、協力いただきました。ありがとうございます。（五十首題）

いいと大目にみてください。」

（「ユースレター」5便より）

今でこそ、当たり前になったメールの「斉送信」。35年前の社会状況を考えれば、これはかなり斬新な手紙です。さらに、その5年後に谷川俊太郎と始めた「ビデオレター」も、映像を使つた往復書簡として実験的な試みとなりました。

ところで、現存する多くの寺山書簡や「ユースレター」の文末には、日付が記されていないことが多いのです。そして、今回ご紹介の日記調草稿も同様に、日付が記されていません。日付が無く、複数の宛先に届く「ユースレター」と、日付のない日記調のエッセイ。

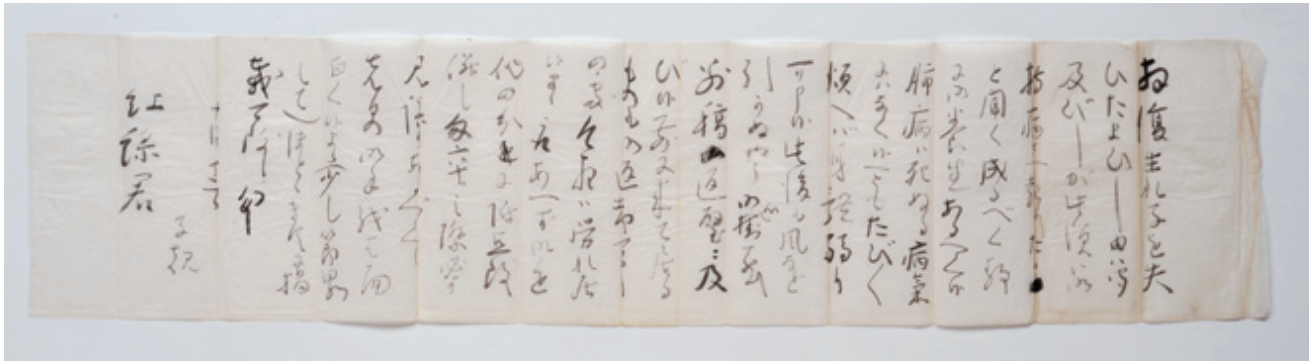
俳句や短歌、そして詩の「定型」から抜け出し、映画や演劇へと、次々と活動域を広めていった寺山修司。彼は、手紙や日記の形式を利用しながら、「ことば」の新たな表現方法を模索し続けたのかも知れません。

平成23年度の収蔵品について

◎ 佐藤紅緑関連資料 ◎

寄贈者：佐藤愛子

寄贈品：佐藤紅緑あて正岡子規・高浜虚子書簡、佐藤紅緑書幅・初版本など92点



明治31年10月12日
佐藤紅緑あて正岡子規書簡翻刻

拝復生れ子を失ひたまひし由は聞及びしが此頃は御持病さへ起りたると聞く 成るべく静に養生あるべく候 肺病は死ぬる病気にはなく候へどもたび／＼煩へば身體弱り可申候 此後も風など引かぬやう御心掛可然候 別稿返璧に及び候 前に来て居るものも御返却可申の処今夜は勞れ居候まゝ取あへず御近作の分に付点致候 併し匆卒の際必ず見誤りあるべく候 先日のお手紙は面白く候まゝ（少し節略して）ほとゝきすに掲載可致候 勿々

紅緑君

子規

◎ 成瀬巳喜男関連資料 ◎

寄贈者：成瀬 有

寄贈品：成瀬巳喜男の撮影台本、身の回り品、写真など2494点



成瀬の書き込みが入った代表作「浮雲」の台本



使用した台本の一部



書斎で使われていた文机と筆記用具一式、灰皿など



「映画旬刊」昭和30年度監督賞記念 肖像画の絵皿

企画展

第32回 世田谷の書展 世田谷ゆかりの作家たち

2013年1月12日(土)～1月27日(日) 1階文学サロン
観覧料:無料 *関連イベントは、4頁をご覧ください。



「帰ってきた 寺山修司」展

2013年2月2日(土)～3月31日(日)
2階展示室

観覧料:
一般700(560)円
大学生500(400)円
高校生・65歳以上・障害者350(280)円
中学生以下無料
*()内は20名以上の団体料金
*会期中、映画上映会等の関連イベントを予定しています。詳細はお問合せください。[Tel.03-5374-9117]

『われに五月を』出版の頃の寺山修司
入院先の新宿・社会保険中央総合病院屋上にて、1957年



企画展

「齋藤茂吉と『楡家のひびと』展 第32回世田谷の書展 1月12日(土)～1月27日(日)～12月2日(日)」

「帰ってきた 寺山修司」展 2月2日(土)～3月31日(日)

12月

2013年1月

2月

3月

コレクション展

「文学に描かれた世田谷―世田谷の詩歌と山本健吉」～2013年4月7日(日)

コレクション展

「文学に描かれた世田谷―世田谷の詩歌と山本健吉」

2013年4月7日(日)まで 1階展示室

観覧料:
一般200(160)円 高校・大学生150(120)円 小・中学生100(80)円
*中学生以下は土・祝・日及び2/2～3/31は無料
65歳以上・障害者100(80)円 *()内は20名以上の団体料金



子ども文学館

- 2月11日 子ども文学さんぽ
「せたがやフシギはっけんシリーズ-喜多見・昔話さんぽ」
(事前申込・1/14 必着締切)
- 3月2日 子ども文学さんぽ
「やってみたくたんけんしたいをかたちにしよう!『テラヤマラソン』でオリエンテーリングだ!」(事前申込・2/9 必着締切)

- 3月16日
「帰ってきた 寺山修司」展
関連企画
「はじめての短歌・はじめての百人一首」(事前申込・3/2 必着締切)
いずれも往復はがきによる事前申込。
詳細はお問合せください。
[Tel.03-5374-9117]

休館日:
毎週月曜日(ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館)

開館時間:
10時～18時
(ただし展覧会入場は
17時30分まで)

交通案内
京王線「芦花公園」駅
南口より徒歩5分
小田急線「千歳船橋」駅
より京王バス(千歳鳥山
駅行)利用「芦花恒春園」
下車徒歩5分



公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南鳥山1-10-10
Tel.03-5374-9111 Fax.03-5374-9120
ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

せたがや文化財団の催し物

- 世田谷美術館 [Tel.03-3415-6011]

- 生誕100年 松本竣介展
11月23日(金・祝)～2013年1月14日(月・祝)



松本竣介『Y市の橋』1943年 東京国立近代美術館蔵

- エドワード・スタイケン写真展
モダン・エイジの光と影1923-1937
2013年1月26日(土)～4月7日(日)

ミュージアム コレクション

- 高橋秀の世界 版画1959-2000
2013年1月25日(金)～4月21日(日)

- 世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
[Tel.03-5450-9581]

- 向井潤吉とふるさと・京都
12月11日(火)～2013年3月20日(水・祝)

- 世田谷美術館分館
清川泰次記念ギャラリー
[Tel.03-3416-1202]

- 清川泰次のアトリエⅢ
12月11日(火)～2013年3月20日(水・祝)

- 世田谷美術館分館
宮本三郎記念美術館
[Tel.03-5483-3836]

- 宮本三郎のデッサン教室
12月11日(火)～2013年3月20日(水・祝)

- 世田谷文化生活情報センター
世田谷パブリックシアター
[Tel.03-5432-1526]

- 『ハーベスト』
作:リチャード・ピーン、翻訳:平川大作、
小田島恒志、演出:森新太郎
出演:渡辺徹、佐藤アツヒロ、小島聖、
七瀬なつみ他
12月11日(火)～12月24日(月・休)
世田谷パブリックシアター

- 『マクベス』

原作:W.シェイクスピア、翻訳:河合祥一郎、
構成・演出:野村萬斎
出演:野村萬斎、秋山菜津子、
小林桂太、高田恵篤、福士恵二
2013年2月22日(金)～3月4日(月)
世田谷パブリックシアター



撮影:久家靖秀

- 世田谷文化生活情報センター
生活工房 [Tel.03-5432-1543]
- アトツギ展 山と里、庄内にまなぶ
11月23日(金・祝)～2013年1月14日(月・祝)



- DAYS JAPAN写真展
「地球の上に生きる」
2013年1月20日(日)～2月3日(日)
- 世田谷文化生活情報センター
音楽事業部 [Tel.03-5432-1535]
- 異分野とのコラボレーション「詩と音楽」



- 日本のうた 成城ほっとコンサート
2013年3月20日(水・祝) 15時30分開演
成城ホール